

(論文内容の要旨)

第一編 八幡宮説話の研究

第一章 八幡宮巡拝記

第一節 八幡宮巡拝記概説

『八幡宮巡拝記』は、鎌倉時代中期に編纂された、八幡宮関係の縁起や靈驗譚を収めた説話集である。現在五本の所在が確認されているが、これらの中で特異な構成を持つ京都大学附属図書館所蔵の伝本を中心に成立事情を概説した。また『巡拝記』が、思想的には西国三十三所観音巡礼と同根のものであり、当時実際に行われていたと推定される「八幡宮巡拝」を背景に成立したことを述べた。

第二節 京大本の性格と成立

『八幡宮巡拝記』の諸本の中で、特異な構成を持つ京都大学附属図書館所蔵本が、治承四年まで石清水八幡宮に存在していたとされる後冷泉院勅筆の「記録」を復元するために、『巡拝記』の一本その他の資料をもとに、独自の立場から編纂された靈驗譚集であることを考察した。

第三節 観智院本をめぐって

東寺観智院金剛蔵聖教調査で発見された『八幡大菩薩巡拝記』は、下巻のみの残欠本であるが、国書総目録に載せる諸本に比し、『巡拝記』祖本の姿をよく残している。観智院本と諸本の説話構成、本文を比較することにより、『巡拝記』祖本の姿を明らかにすると同時に、説話の書式を検討することによって、『巡拝記』が三次にわたる作業によって編纂されたことを考察した。

第二章 八幡宇佐宮御託宣集

第一節 原託宣集と現託宣集

『八幡宇佐宮御託宣集』は、八幡神の託宣を記録したものである。現存諸本では、編著者神吽の自序が巻三巻頭に置かれているが、これは現託宣集の巻三から巻十六までの十四巻が原態であることを示すものであり、現託宣集の巻一・巻二は、原託宣集と神吽の他の著作（宇佐大神宮縁起、八幡大菩薩本末因位縁起）をもとに、追補されたものであることを考察した。又、その追補者については、原託宣集にはない武内宿禰関係の記事を増補していることから、その子孫が祀官を務める石清水八幡宮の関係者であることを推定した。

第二節 八幡宇佐宮御託宣集の裏書について

『八幡宇佐宮御託宣集』には、神吽の弟子神叟の手になる裏書と称するものが存在する。裏書の記述からは、神の言葉である『託宣集』について、書写さえはばかれる雰囲気が存在したことが窺われ、神叟とその周辺にいた人々が『託宣集』を増補して現存の十六巻の姿にすることは考えにくいことを述べるとともに、『託宣集』の増補・伝来の背景を考察した。

第三章 八幡愚童訓とその影響

第一節 八幡愚童訓と八幡宮巡拝記

八幡宮関係の靈驗譚集のうち、甲乙二本の『八幡愚童訓』と『八幡宮巡拝記』の関係を考察した。甲本は、元寇の際に異敵降伏祈祷を行った八幡宮側が、元寇の後に神祇の「軍忠状」として編纂したものであり、護国的側面を強調している。一方乙本には、甲本にない個人の魂の救済と本地垂迹思想が見られる。この両者は、先行する『八幡宮巡拝記』の二つの性格、八幡信仰の護国的側面と現当二世の救済を

継承したものであることを考察した。

第二節 八幡宮縁起類と八幡愚童訓甲本

鎌倉時代末までに作られた八幡宮関係の古縁起類には、『扶桑略記』所引縁起類・石清水八幡宮伝法院絵銘と、『八幡宇佐宮御託宣集』所載「和氣清麻呂参宇佐宮縁起」があるが、前二者は八幡宮が自らの教宣のために作成したものであること、また後者は物語絵巻の系統を引くことを指摘した。また中世以降に作られた縁起には、神功皇后の三韓遠征を描いた二種の縁起絵巻があり、一類は、素朴な地方伝承を含み、八幡宮の地方での教宣との関係が窺えること、二類は、一類をもとに『八幡愚童訓』甲本の記事を用いて整理したもので、神前奉納のために作成されたものであることを考察した。さらにこの二種の縁起絵巻の系統を引く御伽草子本地物と、『八幡愚童訓』甲本の江戸時代における出版状況について述べた。

第四章 八幡信仰と説話

第一節 石清水八幡宮の信仰と説話

石清水八幡宮の遷座縁起、神仏習合の深化に伴う信仰の変遷、八幡神の異敵降伏・航海神としての側面、祭礼等について、石清水八幡宮にまつわる資料と説話を紹介しながら略述し、さらに、明治の神仏分離が八幡宮の本来の性格を変えるに至ったことを述べた。

第二節 説話集と八幡信仰―「最澄伝」をめぐって―

中古・中世の説話集における八幡宮説話は、時代によって様々に変化しているが、その中で変わらず語り続けられたのが、伝教大師最澄と八幡神にまつわる説話である。八幡神は、常に最澄の入唐求法の旅との関わりの中で語られてきたことから、八幡神の基本的性格が護法善神と理解されていたことを明らかにした。また説話集の「最澄伝」が、常に八幡神に賜った紫袈裟・紫衣の話を伴うのは、説話の信憑性

の裏付けとして、「物」が重要な意味を持つことが背景にあることを考察した。

第二編 神仏説話の諸相

第一章 神仏説話の背景

第一節 僧の肉食説話について―至れる聖は魚鳥を嫌はず―

古代・中世の説話集に現れる僧の肉食説話について、古代のものは南都の戒律(小乗戒を含み、肉食を認める)と関係があり、中世のものは鎌倉期の戒律復興運動との関わりから生まれたものであることを考察した。また、後者については、肉食僧に興福寺関係の僧侶が多いことから、維摩経の菩薩思想との関係も考えられることを論じた。

第二節 動物報恩譚の変質―霊異記から古今著聞集へ―

動物報恩譚は、本来仏教の殺生戒と輪廻思想に裏打ちされた放生の功德譚として語られていたが、次第に変質し、後の時代には放生された動物に逆に怨まれる話が登場する。その背景には、時代とともに放生儀礼が衰退化し、特定社寺(石清水八幡宮)に固定化するようになったこと、また動物報恩譚そのものにも、語られる内容に多様化と世俗化が見られるようになったこと、さらに神仏習合思想の深化の影響が指摘できることを、『日本霊異記』から『古今著聞集』に至る説話集の分析を通して考察した。

第三節 流布本『発心集』成立試論(一)―神祇説話を手がかりとして―

本来的な形を保っていると考えられる流布本『発心集』に収められた神祇説話について検討し、異本の神宮文庫本のみに存する四話の神祇説話と現存流布本巻四第47話の計五話が、説話配列とモチーフの連続性の面から考えて、後の増補であるこ

とを指摘した。

第四節 流布本『発心集』成立試論（二）―巻七・八の神祇説話を手がかりとして―

流布本『発心集』の巻七から巻八・97話までは、原態である巻六までと、編纂方針・内的つながり・表現の類似などが指摘できることから、巻六以前と同一人物の手になるものと推定し、巻八第98話以降の神祇説話は、その内容から後の附加であることを述べた。

第五節 流布本『発心集』成立試論（三）―神祇説話を手がかりとして―

長明の神祇観を明らかにした上で、流布本『発心集』巻八第98話以降の神祇説話が、元寇後の神国思想の高揚期に、賀茂社関係者によって増補整理されたものであることを推定し、現流布本『発心集』の成立過程を考察した。

第六節 空也説話とその展開―空也と松尾明神―

「我が国念仏の祖」と言われる空也には、浄土願生者と法華持経者の両面を語る説話がある。歿後まもなく語られた話には浄土願生者としての面影が濃いが、平安末期から鎌倉初期にかけては法華持経者としての空也を語る話が多い。その背景には、空也の寺六波羅蜜寺の天台化の問題と、法輪寺・松尾社を介して、六波羅蜜寺と三井寺とが密接な関係にあったことを明らかにし、空也が松尾明神に「法の衣」を布施する説話もそのような流れの中で語られたものであることを考察した。

第二章 物語と社寺

第一節 白描絵巻『中宮物語』と社寺

中古・中世物語の中に登場する、伊勢・賀茂・春日社・住吉社・長谷寺・吉野山・

その他の社寺が、物語の中でそれぞれに役割を持ち、機能していること、また後世には先行する文学作品に登場する社寺が、和歌の本歌取りのように、イメージとして使用され、物語の展開に関わることを考察した。さらに、白描絵巻『中宮物語』は、後半を欠き、物語の全体が不明であるが、社寺関係記事から、作者や成立年代について推定できることを述べた。

第二節 住吉明神説話について―住吉大社神代記から住吉物語におよぶ―

『住吉大社神代記』に見える住吉明神の性格には、現人神・軍神・禊祓神・海神・農業神・崇り神などがあるが、平安末から歌神の性格を持つようになった。このような住吉明神の性格は、『住吉物語』にも投影しており、物語に登場する「龍田」、「住吉」等の地名とも関係すること、また後世の『住吉物語』では、長谷寺観音の夢告が登場するが、本来は住吉明神が主たる役割を担っていたもので、現形する神・化現する仏菩薩という類似性と、住吉明神の歌神化などの信仰の変化が影響したことを考察した。さらに、残された資料から、『住吉物語』改変の跡を推定した。

第三編 説話と説話集の研究

第一章 今昔物語集と大和物語

第一節 「うてのつかひ」と「うさのつかひ」―大和物語の本文改編と歌語りの場―

『大和物語』の四段と百二十六段は、天慶の乱の平定に活躍した小野好古の話であるが、好古が西国に下った時の身分について、流布本系が「うてのつかひ（追討使）」で下ったとするのに対し、異本系の御巫本・鈴鹿本は「うさのつかひ（宇佐使）」で下ったとしている。天慶の乱当時の事実関係と、この話が語られた「場」の性格から、これらの話は、異本系の本文の方が本来の形であり、歌語りの場で語

られた素材段階の姿を伝えていることを考察した。

第二節 御巫本・鈴鹿本大和物語の本文改編について—敬語を手がかりとして—

『大和物語』の四段と百二十六段は、ともに天慶の乱の追討使小野好古の話であるが、四段では諸本ともに好古に敬語をつけているのに対し、百二十六段では、流布本系では敬語をつけ、異本系の御巫本・鈴鹿本ではつけないという相違点がある。両系統の敬語の扱い方を比較した結果、流布本系の方が敬語を正確に用いていること、異本系には敬語を契機とした誤った「読み直し」があることを論じた。

第三節 今昔物語集卷三十について—大和物語受容の方法—

『今昔物語集』卷三十に載せる『大和物語』との共通説話について、『今昔物語集』の側の歌の引用に異同が多いこと、話の筋が複雑化していることから、『今昔物語集』は『大和物語』に直接依拠していないことを論じた。また、両者の共通説話において、『今昔物語集』が『大和物語』に用例のない「強ち」の語を使用している点について、この語を用いることによって、『今昔物語集』が『大和物語』の歌物語を教訓話に仕立て直していることを考察した。

第二章 古本説話集と宇治拾遺物語

第一節 古本説話集上巻について—世継物語との関係から—

先後関係に異論のある『世継物語』と『古本説話集』との関係について、両者のどちらとも共通話がある『大和物語』・『栄花物語』・『枕草子』の現存諸本との関係、説話配列の方法などを考察することにより、『世継物語』が『古本説話集』に先行することを論じた。

第二節 古本説話集下巻第六十五話「信濃国の聖の事」について

『古本説話集』第六十五話「信濃国の聖の事」は、本来は信濃国からやってきた命蓮聖の話であり、「飛蔵」と「ふくたい」という「物」にまつわる由来譚（縁起）として語られていたが、説話の中間に、命蓮の中央における靈驗譚という伝承圏の異なる話が附加され現在のようになつたと推定し、この話が信貴山朝護孫子寺の中興縁起として作成された可能性を指摘した。また、同文的同話関係にある『信貴山縁起絵巻』の詞章と『宇治拾遺物語』の本文について、前者は絵巻という性格に規定され、説話的興趣に満ちた会話部分が省略されていること、後者については、『古本説話集』のような形の本文を省略したり、解釈を加えたものであることを指摘した。

第三節 宇治拾遺物語の方法―冒頭語の考察を中心に―

『宇治拾遺物語』の説話は四種類の冒頭語を持つが、「今は昔」、「これも今は昔」、「昔・これも昔」、「冒頭語なし」の順に話数が多い。これは説話を収録した順序を示すものであることを指摘した。又、源隆国以後の説話が「これも今は昔」の冒頭語を持つのは、既にある程度完成していたものに、後から話を附加しやすいようにするためであることを、冒頭語の配列と分析を通して考察した。

第四節 『宇治拾遺物語』編者の位置―忠通と頼長をめぐって―

『宇治拾遺物語』は、源隆国作の散佚『宇治大納言物語』系統の説話群と、新たに加えられた隆国以後の説話群とに分けられるが、特に後者の話には、法性寺殿藤原忠通周辺の人物が多く登場することが指摘されている。忠通の弟、悪左府頼長に関する説話と、忠通が登場する説話を取り上げ、それらの話の伝承圏を明らかにし、忠通のごく近い所に『宇治拾遺物語』の作者がいたのではないかと推定した。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は三編からなり、その一は「八幡宮説話の研究」、二は「神仏説話の諸相」、三は「説話と説話集の研究」と題される。中世の説話に関するあらゆる問題を扱ったという観のある大著であるが、その議論の出発点であり、中心であるのは、第一編において考察される石清水八幡の神をめぐる説話群であった。平安時代初頭、九州宇佐八幡宮の神を都の南山に勧請した石清水八幡宮は、賀茂や松尾など山城国古来の諸神社に先駆けて、固有の神祇信仰に外来の仏教を積極的に融合させていった。八幡の神は、神でありながら大菩薩を名乗り、殺生戒によって魚鳥を供物としない神であった。そのような本地垂迹信仰の展開を、第一編の諸論は、『八幡宮巡拝記』『八幡宇佐宮御託宣集』『八幡愚童訓』といった書物の成り立ちを書誌的に明らかにすることによって辿ってゆく。それらは、たとえば『巡拝記』が西国三十三箇所観音巡礼と同様の八幡宮巡拝を背景にして成立したことを示し、『御託宣集』が石清水八幡宮の関係者によって増補され、伝来されたことを明らかにし、さらに『愚童訓』の諸本が、元寇降伏を祈願する護国的性格の強いものと、個人の魂の救済を説く靈異譚をもつものとに分かれることを考察した。一見些末にみえる書誌的な議論がいつのまにか八幡信仰の多様なあり方を明瞭にしてゆくことになるのだが、それらは、細部を見ながらも常に巨視を忘れず、逆に巨視は常に細部に対する注意深さに支えられることを知る論者によって、初めて可能となった方法と言えるだろう。ただし、読者への配慮を考えるならば、この第一編の諸論は順序を変えて、八幡神についての総論的記述のある第四章を冒頭に置くべきではなかったかと思う。

第二編は、第一章で「神仏説話の背景」を、第二章で「物語と社寺」を主題として論じる。まず第一章第一節「僧の肉食説話について」は、僧侶の肉食を描く説話のうち、古代のものは養生のための肉食を認める小乗戒の影響を受けるものであり、中世の「いたれる聖はかく魚鳥を嫌はぬものなり」(十訓抄)と言われるようなそ

れは、真の悟りを開いた菩薩は衆生を救うための方便として破戒を犯すという考え
方によるものと考えられ、「非道を行ずるを是れ仏道に通達すと為す」という維摩
經の教えにも関わる可能性があることを論じる。古代から中世にかけての仏教思想
の展開と、説話における肉食の描き方の変化との関連を的確にとらえた、これも微
視巨視かねそなえた好論であった。また第二節では、古代の動物報恩譚が、仏教的
な殺生戒と輪廻思想に基づく放生の功德譚であったのに対して、中世では、放生し
た動物に、神前に供えられることによって得脱できたはずの機会を奪う行為と逆に
怨まれる話があったことを紹介する。古代から中世への数多くの説話の歴史的展開
を精緻に追った上で、中世のその説話を、魚鳥を神供とする古来の習慣と、殺生戒・
輪廻思想との間の矛盾を合理化しようとするものとしたのは、興味深い議論であっ
た。その他、第三節から第五節までは鴨長明の説話集『発心集』の、書物としての
成立を論じるものであった。論者の議論が、常に書誌から出発することを典型的に
示すものである。また、第六節は空也説話の展開を考察する。

第三編は、『今昔物語集』『大和物語』『古本説話集』『宇治拾遺物語』などにおけ
る共通説話を比較することによってその先後関係を考え、あるいはそれぞれの書物
としての成立を考え、編者がどのような人物であったかを推測する多彩な論文群で
ある。これだけで一冊の説話論集として独立させていいほどの質と量とをもつもの
であり、正確な考証によつて的確な結論がそれぞれに導かれているものと評価でき
る。もっとも、その反面、話題があれこれと多彩すぎて、主題らしいものの見いだ
しがたい欠点を指摘することができるかも知れない。しかし、その不統一感は、数
多くの中世説話集のいずれを避けることもなく取りあげ、その書物の成立と展開、
その内容、その思想のすべてを読み解こうとする論者の貪欲なまでの積極的な態度
に由来するものと言ふべきであろう。その説話学の大成を祈りたい。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値ある
ものと認められる。平成二十一年一月二十一日、調査委員三名が論文内容とそれに
関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。